

「ふるさと木島平を心に刻む教育」の目指すところは

日々の教育実践によって どの子ども「対話し、自己の生き方を深める子ども」へと育むこと

木島平小・中学校では、教育理念と教育目標を共有しています。公教育9年間、子どもたちとかかわり合う私たち教師の使命は、木島平村の「もの・ひと・こと」に学び、どの子どもにとっても成長の糧としての「ふるさと」を刻む教育活動を推進するとともに、多様化する次代の担い手となって、力強く歩んでいける子どもを育むことです。社会が変化しようとも、自身の夢や目標に向けて歩み続ける「対話し、自己の生き方を深める子ども」を育むことが、木島平教育で目指す子ども像です。

☆学校づくり 多様な価値観を持った方々との出会いで子どもを育む

学校は、どういう場所なのだろうか。子どもたちにとって学びのある「学校」とは、どんな場所なのだろうか。教師にとって働きやすい「学校」とは、どんな場所なのだろうか。保護者にとって我が子を喜んで通わせたい「学校」とは、どんな学校なのだろうか。地域の方々が、未来を託す育みに信頼を寄せる「学校」とは、どんな学校なのだろうか。普段、あまり考えもしない「学校」という存在を、もう一度問い直す必要に迫られていると感じています。

少子高齢化が進む現在、「公教育」としての「学校」は、次の世代を担う子どもたちにどのような力を育み、子ども自身が人生の豊かさを希求し続ける「生きる力」、換言すれば「自己教育力」の育成につなげていくかが求められていると言ってもいいでしょう。

このような「学校」を実現するために、教師として、保護者として、地域住民として、為すべきことは何であり、どのような取組を日常化していくことが必要なかが問われています。

☆子どもを育てる 子どもの「自己教育力=対話し、学びを深める子ども」を育むために

私たち教師は、経験の内側にある「学校」という存在が、知らず知らずのうちに内在化しています。「ずっとそうしてきた。こうあるべきだ。こうでなければならない。」等々のやり取り。このやり取りの中にあるものは、私たちが今日までの経験の中で、自身の理想とする学校の原風景を作り上げたことによって発せられています。しかし、立ち止まって考えてみる必要があります。これからの時代は、子どもたちも私たちにとっても未経験の時代が到来します。人工知能(AI)が発達し、多くの職種がそのAIにその業務を委ねる時代がもう目の前に迫っています。山間地の学校だから、自然豊かな木島平村には、そのような変化は関係ないと言うのは無責任です。公教育を修業した子どもは皆、社会の一員として自身の夢や希望を極める道を歩み始めます。多難な社会であることは誰しもが予想するところです。

では、学校は子どもたちにとってどうあるべきか。そして、私たち一人一人は、子どもたちと日々向き合い、どのように自己教育力を育んでいくのか。独りで、また組織で、どのようなことができるかを問いながら、授業づくり・学級づくり・学校づくりをしていくことが求められています。

☆教師の居方 子どもにとって最大の理解者であり支援者で在り続ける

教師は、子どもにとって最大の理解者であり支援者であってほしいと思います。多感な小中学生と向き合う私たちは、自身の価値観を押し付けるような行為は極力控えなければなりません。小学校から「子どもで入学し」中学校は「大人で卒業」していくと言われるほど、子どもたちはひと山ふた山を超える時期であることを理解して向き合うことが重要だと言えます。このような教師の居方は、子ども一人一人は人格を持つ学び手であることを尊重すること、そして、教室は自由な創造的な場であることが必要です。

このような関係でつながる教師と子どもで築く学級文化は、子どもたちの学校生活に潤いと居心地のよい学級づくりにつながっていくと考えられます。

☆授業観 「教え合い」から「学び合い」への発想の転換

学び合う関係と、教え合う関係は全く違います。「できた人は教えてあげて」これは教え合う関係です。「分からない人、訊くんだよ」「互いに考えてみましょう」これは学び合う関係です。教え合う関係だと、「なぜ教えてくれないの?」という受け身の姿勢をつくってしまいます。それとは真逆に、自分で支援・助言・考えを求める子どもを育てたいものです。参考になるよい方法は「写してもいいよ」と言える教師の構えが、分からないこと、納得できないことを周囲の友だ

ちに訊ける関係をつくり上げます。分からないことを周囲の友達に気軽に訊いたり、自分の考えを投げかけたりできる関係を築くことが、学び合いの始まりと言えます。学びは「真似び」であり、子どもたちは「なぞりながらたどり、たどりながらなぞる」存在でもあります。

☆聴き合う関係 子どもの話を聴ける教師のもとで、聴ける子どもが育つ

私たちは、これまで様々な指導方法なるものを取り入れ、子どもと日々向かい合ってきました。「ハンドサイン」「聞く態度」「声の大きさ」「姿勢」等々、このように形式的な手法から脱却すると、子どもたちから自然とその行為が無くなっていきます。これは、「そのことに何の意味があるのか」を教師が認識した時点で、そのような手法は解消していくのです。教え合う関係は一方的な関係ですから、言い換えれば「お節介の関係」であり、「価値観の強制」といえます。学び合う関係は、「さりげない優しさの関係」です。このことを認識し、教師も子どもの声を丁寧に聴くことが必要です。この姿勢は、子どもたちに浸透し、「分からないことは訊ける」「友だちの声を聴ける」関係づくりへと広がっていきます。まずは、子どもの声を、そして声なき想いを聴ける私たちになることです。

また、「話し合い」は、わかっている子、知っている子によって行われます。しかし、学びは、聴いている時に生まれていきます。「聴き合い」の姿勢は、どの子の発言の重みも同じように聴いていこうとする対等で自由な雰囲気を形成すると同時に自己内対話を深めていきます。

☆真正の学びへ 学習の本質を捉え直し、子どもの学びを支える教師に

何より大事なことは、子どもの視点に立った学習になっているかという点です。対象との対話を通し、それらを意味づけていくのは子どもたち自身です。「子どもの学びを見つめ、学びの主体者である子どもを、どのように支えることができるか」という点が、私たちの課題になってきます。

○子どもの学び

- ・これまでの経験の中で、自己を深めてきた子どもが、対象に出会い、その子ならではの「問い」や「願い」を抱く
- ・協同する学びで学習を深めていく
- ・正解を覚えさせられるのではなく、子ども自身が意味化を図り、思考を深めていく
- ・その教科ならではのものの見方や考え方に没頭していく
- ・課題解決の方策を見つけて、さらに追究していく
- ・考えを表現したり、友からの表現を受け止めたりすることを繰り返す中で、考えを統合し深めていく

○子どもの学びを支える教師

- ・対象に対する、子どもの認識、思い、願いなどを見つめる
- ・対象との対話を通して、子どもが学んでいきたいこと、自己の生き方を深めていきたいことを見つめる
- ・その教科ならではのものの見方や考え方でその子をとらえる
- ・対象に対する子どもの「問い」や「願い」、その教科ならではのものの見方などから、子どもの考えの統合や深まり、そのための学びの道筋を考える

このように、単なる知識の習得ではない広がりや教科学習で追究していく必要があります。自分が理解したことを友だちに伝える喜び、友との追究で納得したり考えを統合し深めたりした喜び、そうした喜びが内発的動機付けを高め、より深い学びを目指していく。このことこそ、私たちの追究している「学び合い」の本当の意味での価値であると思います。子どもがもっと意味を分かりたい、世界の広がりを知りたい、知識がつながっていることが面白いということを、学びの中心に据えることが大切です。それには、子どもが授業で経験したことの意味付けを、教師が明示化していくことが必要とされます。

☆同僚に学ぶ 教師も同僚に学ぶことで教育力向上に努めたい

本当に私たちが学びの場の中で喜び合うことは、子どもと「共に学んでいる実感」です。教えているという感覚ではなく、目の前の子どもが課題解決に向けて学び合っている、私も子どもの学びの輪の中に「居る」という実感こそが、私たちを動機付けるし、教師としてのやり甲斐を感じさせるのではないのでしょうか。

私たち教師もまた子どもと同様に、教師としての自身の教育力の向上を目指す必要があります。「学びは独りでは成立しない」の言葉があるように、私たちの教育力向上も決して独りでは成立しない。同僚の実践から学びながら自身の教育力の向上を目指したいものです。

木島平小・中学校では、仮説実証型の授業から脱却して14年目を迎えます。私たちが今まで経験してきた知識伝達型の「知識の習得」から「意味理解」への変革です。今までの経験知に頼ることなく、目の前の「子どもの事実に学ぶ」ことを大事にしながら、令和8年度の木島平小・中学校でのスタートとしたいものです。

ふるさと木島平を心に刻む教育の実践

「ふるさと木島平を心に刻む教育」を根本原理とし、子どもと教師が木島平村で出会えた喜びを感じながら共に学び育つ学校を創造します。それは、子どもにとって「居心地のよい学校」であり、地域にとって「開かれた学校」であるよう努めます。そして、どの子どもにも学習権を保障する学校づくりを進めます。

『対象・友・自分』との対話によって自己の生き方を深める子どもを、協同する学びを通して育成する学校づくり

子どもと教師が共に育つ学校となるように、対話的コミュニケーションを重視した「『対象・友・自分』との対話によって自己の生き方を深める子どもを、協同する学びを通して育成する学校づくり」を進めます。このことにより、様々な生き方や考え方が尊重され、個性が響き合う子ども集団、職員集団の形成を図り、学校生活に学び合いへの気風を高めます。

◇『対象・友・自分』との対話によって自己の生き方を深める子どもを、協同する学びを通して育成する学校づくりを推進するために、次の点を大事にします。

- ・どの子も尊重され、互いに支え考えを深め合う関係づくりを確立します。
- ・探究的で協同的な学びを日常化し、子どもたちが対話し、学びを深める力を育みます。
- ・省察的実践を通して、教師の教育力向上を図るようにします。
- ・保護者や村民の参画によって、開かれた学校づくりを進めます。

学校教育目標「心と体をひらいて学ぶ生徒」は、子どもに発信する言葉ですが、そのまま教師にとっての目標でもあります。教師が変わらなければ何も変わらない。互恵的な関係を築き、どの子の学びも保障する日々の取り組みが必要です。そのための教師としての「居方」や「構え」を、次のように示します。

◇「『対象・友・自分』との対話によって自己の生き方を深める子ども」を、協同する学びを通して支える教師の居方・構え

- ・自らの授業を公開し、同僚と共に、子どもを育てる同僚性を築ける教師でありたい。
- ・子どもの声や想いを受け入れ、聴き入れる教師でありたい。
- ・「材」に対する子どもの「問い」や「願い」を見つめると共に、その教科ならではのものの見方や考え方を十分に突き詰め、自己を深める学びを追究する教師でありたい。

令和8年度 経営の重点

木島平小・中学校は一貫教育として、教育理念、目指す子ども像、子どもを育む手立て、システム等が確立されています。さらには、学校教育を扶けるコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）も組織されています。一村一校という教育環境の中で、村当局から手厚い支援をいただいて学校が運営されている現状があります。木島平村の子は村で育てると言う気風が強いわけです。ここに挙げる令和8年度の重点は、前年度の学校自己評価を踏まえて位置付けたものです。

学校教育目標

心と体をひらいて学ぶ生徒

めざす生徒の姿

創造…教科の真正性に向かって夢中になる生徒
 協同…心と体をひらいて他者と工夫して学び合う生徒
 探究…学びの本質に向かって、もがきながら自己を形成する生徒

令和8年度の重点

<出会いと対話>

(他者によって) **気付き直し**、(自らを) **問い直し**、(新たな自分を) **編み直し**していく姿を全教育活動を通して大切にしていく。

<伝統を受け継ぐ気風>

合言葉「**き・じ・ま**」(きれいな**歌声**・地道な**清掃**・真心**挨拶**)
 ~大切にしてきた伝統を**プライド**へ~